

歎異抄

序文

竊^{ヒソカ}ニ愚案^{グアン}ヲ廻^{メグ}ラシテ、粗^{ホボ}古^コ今^{コン}ヲ勘^{カン}ウルニ、先^{セン}師^シノ口^ク伝^{デン}
之^{シン}真^{シン}信^{シン}ニ異^{コト}ナルコトヲ歎^{ナゲ}キ、後^{コウ}学^{ガク}相^{ソウ}統^{ツウ}之^ノ疑^ギ惑^{ゴク}有^{ユウ}ルコト
ヲ思^シフニ、幸^{サイ}ニ有^{ワイ}縁^{エン}ノ知^チ識^シニ依^{ヨラ}不^ズ者^バ、争^イ力^カ易^デ行^{イギ}ノ一^{イチ}門^{モン}
ニ入^イルコトヲ得^エン哉^ヤ。全^{ゼン}ク自^ジ見^{ケン}之^ノ覺^{カク}語^ゴヲ以^{モツ}テ、他^タ力^{リキ}之^ノ
宗^{シュウ}旨^{ウシ}ヲ乱^{ミダ}ルコト莫^{ナカ}レ。仍^{ヨツ}テ、故^コ親^{シン}鸞^{ラン}聖^{セイ}人^{ニン}ノ御^オ物^{モン}語^ゴノ
趣^{オモムキ}、耳^{ミミ}ノ底^{ソコ}ニ留^{トモ}ムル所^所、聊^{イササ}力^{リキ}之^ノヲ注^{シュ}ス。偏^{ヒトヘ}ニ同^{ドウ}心^{シン}
行^{ギョウ}者^{ジャ}之^ノ不^フ審^{シン}ヲ散^{サン}ゼンガ為^{タリ}也^也ト云^{ウン}々^々。

第一条

弥陀の誓願^{グワン}不思議にたすけられまひらせて、往生^{オウジヤウ}をばとぐるなりと信じて、念仏まふさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち、攝取不捨^{セツシュフシヤ}の利益^{リヤク}にあづけしめたまふなり。

弥陀の本願^{グワン}には、老少善惡^{ゼンマク}のひとをえらばれず、ただ信心^{エウ}を要^{エウ}とすとしるべし。そのゆへは、罪惡深重^{シンヂユウ}・煩惱熾盛^{シシヤウ}の衆生^{シユウ}をたすけんがための願^{グワン}にまします。

しかれば、本願^{グワン}を信ぜんには、他の善も要^{エウ}にあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに。悪もおそるべからず、弥陀の本願^{グワン}をさまたぐるほどの悪なきゆへにと云々。

第二条

おのおの、十余ヶ国のさかひをこえて、身命シンミヤウをかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御ころざし、ひとへに、往生極樂のみちをとひきかんがためなり。しかるに、念仏よりほかに往生のみちをも存知ゾンヂし、また法文等ホウモンをもしりたるらんと、こころにくくおぼしめておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南都・北嶺ナント ホクレイにも、ゆゆしき学生ガクシヤウたち、おほく座オハせられてさふらうなれば、かのひとにもあひたてまつりて、往生の要エウ、よくよくきかるべきなり。親鸞シンランにおきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかぶりと、信ずるほかに、別の子細なきなり。

念仏は、まことに、浄土にむまるるたねにてやはんべらん、また、地獄ジゴクにおつべき業ゴフにてやはんべらん。惣ソウじてもつて存知ゾンヂせざるなり。たとひ、法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう。そのゆへは、自余ジヨの行もはげみて、仏ブツになるべかりける身が、念仏をまふして地獄にもおちてさふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行も

およびがたき身なれば、とても、地獄は一定すみかぞかし。

弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教、
虚言キヨゴンなるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導
の御釈オンシヤク、虚言したまふべからず。善導の御釈オンシヤクまことな
らば、法然のおほせ、そらごとならんや。法然のおほ
せ、まことならば、親鸞がまふすむね、またもつてむ
なしかるべからずさふらう歟カ。

詮センずるところ、愚身グシンの信心におきては、かくのごと
し。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんと
も、またすてんとも、面々の御オンはからひなりと云々。

第三条

善人なをもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや。

しかるを、世のひとつねにいはく、「悪人なを往生す、いかにいはんや善人をや」。この条、一旦、そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。

そのゆへは、自力ジリキサゼン作善のひとは、ひとへに他力をたのむところかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。

煩惱具足グソクのわれらは、いづれの行にても、生死をはなるることあるべからざるを、あはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力シヨウインをたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。

よつて、善人だにこそ往生すれ、まして悪人は、とおほせきふらひき。

第四条

慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。ショウドウ

聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもつて、おもふがごとく、衆生を利益リヤクするをいふべきなり。

今生に、いかに、いとをし、不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲、始終なし。

しかれば、念仏まふすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらうべきと云々。

第五條

親鸞は、父母ブモの孝養キョウヨウのためとて、一返イツペンにても念仏ニッポまふしたることいまださふらはず。

そのゆへは、一切ウジヨウの有情は、みなもつて世々セセシヨウジヨウ生々の父母・兄弟なり、いづれもいづれも、この順次生ジュンジシヨウに、仏になりて、たすけさふらうべきなり。

わがちからにてはげむ善にてもさふらはばこそ、念仏を廻向して、父母をもたすけさふらはめ。ただ、自力をすてて、いそぎ（浄土リクドウの）さとりをひらきなば、六道リクドウ・四生シシヨウのあひだ、いづれの業苦ゴウクにしづめりとも、神通方弁をもつて、まづ有縁を度すべきなりと云々。

第六条

専修念仏のともがらの、わが弟子、ひとの弟子といふ相論のさふらうらんこと、もつてのほかの子細なり。

親鸞は、弟子一人ももたずさふらう。そのゆへは、わがはからひにて、ひとに念仏をまふさせさふらはばこそ、弟子にてもさふらはめ、弥陀の御もよほしにあづかつて、念仏まふしさふらうひとを、わが弟子とまふすこと、きはめたる荒涼のことなり。

つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あればはなるることのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなんどいふこと、不可説なり。如来よりたまはりたる信心を、わがものがほにとりかへさんとまふすにや。かへすがへすも、あるべからざることなり。

自然のことはりにあひかなはば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云々。

第七条

念仏者は、無碍の一道なり。

そのいはれいかんとならば、信心の行者には、天神・地祇も敬伏し、魔界・外道も障碍することなし。罪惡も業報を感じることあたはず、諸善もおよぶことなきゆへなりと云々。

第八条

念仏は、行者のために、非行・非善なり。

わがはからひにて行ずるにあらざれば、非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば、非善といふ。ひとへに、他力にして、自力をはなれたるゆへに、行者のためには、非行・非善なりと云々。

第九条

「念仏まふしさふらへども、踊躍歡喜のころおろそかにさふらふこと、また、いそぎ浄土へまひりたきころのさふらはぬは、いかにとさふらうべきことにてさふらうやらん」とまふしいれてさふらひしかば、
「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじところに
てありけり」。

「よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ、往生は一定（と）おもひたまふなり。よろこぶべきころをおさへて、よろこばざるは、煩惱の所為なり。しかるに、仏、かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごとし、われらがためなりけりとしられて、いよいよ、たのもしくおぼゆるなり」。

「また、浄土へいそぎまひりたきころのなくて、いささか所勞のこともあれば、死なんずるやらんと、ころぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。久く遠劫よりいままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだむまれざる安養浄土はこひしからずさふらふこと、まことに、よくよく、煩惱の興盛にさふらうにこそ。なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきて、ちか

らなくしておはるときに、かの土へはまひるべきなり。いそぎまひりたきころなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよいよ、大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ」。

「踊躍歡喜のころもあり、いそぎ浄土へもまひりたくさふらはんには、煩惱のなきやらんと、あ（や）しくさふらひなまし」と云々。

第十条

念仏には無義をもつて義とす。不可称・不可説・不可思議のゆへに、とおほせさふらひき。

後半序文

そもそも、かの御在生のむかし、おなじくこころざしをして、あゆみを遼遠の洛陽にはげまし、信をひとつにして、心を当来の報土にかけしともがらは、同時に、御意趣をうけたまはりしかども、そのひとびとにもなひて念仏まふさるる老若、そのかずをしらずおはしますなかに、上人のおほせにあらざる異義どもを、近来は、おほくおほせられあふてさふらうよし、つたへうけたまはる、いはれなき条々の子細のこと。

第十一条

一文不通のともがらの念仏まふすにあふて、「なんぢは、誓願不思議を信じて念仏まふすか、また、名号不思議を信ずるか」といひおどろかして、ふたつの不思議を子細をも分明にいひひらかずして、ひとのころをまどはすこと。

この条、かへすがへすも、こころをとどめて、おもひわくべきことなり。

誓願の不思議によりて、やすくたもち、となへやすき名号を案あんじいだしたまひて、この名字をとなへんものを、むかへとらんと御約束あることなれば、まづ、弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまひらせ、生死をいづべしと信じて、念仏のまふさるるも、如来の御はからひなりとおもへば、すこしも、みづからのはからひ、まじはらざるがゆへに、本願に相應して、実報土に往生するなり。これは、誓願の不思議をむねと信じたてまつれば、名号の不思議も具足して、誓願・名号の不思議ひとつにして、さらにことなることなきなり。

つぎに、みづからのはからひをさしはさみて、善惡のふたつにつきて、往生のたすけ・さはり、二様におもふは、誓願の不思議をばたのまずして、わがこころに往生の業をはげみてまふすところの念仏をも自行に

なすなり。このひとは、名号の不思議をもまた信ぜざるなり。信ぜざれども、辺地懈慢・疑城胎宮にも往生して、果遂の願のゆへに、つゐに報土に生ずるは、名号不思議のちからなり。これすなはち、誓願不思議のゆへなれば、ただひとつなるべし。

第十二条

経釈をよみ、学せざるともがら、往生不定のよしのこと。

この条、すこぶる不足言の義といひつべし。

他力真実のむねをあかせる、もろもろの正教は、本願を信じ、念仏をまふさば、仏になる。そのほか、なにの学問かは、往生の要なるべきや。まことに、このことはりにまよへらんひとは、いかにもいかにも、学問して、本願のむねをしるべきなり。経釈をよみ、学すといへども、聖教の本意をこころえざる条、もつとも不ふ便びんのことなり。

一文不通にして、経釈のゆくぢもしらざらんひとの、となへやすからんための名号におはしますゆへに、易行といふ。学問をむねとするは、聖道門なり。難行となづく。あやまつて、学問して、名聞・利養のおもひに住するひと、順次の往生いかがあらんずらんといふ証文もさふらうべきや。

当時、専修念仏のひとと聖道門のひと、法論をくだてて、「わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はおとなり」といふほどに、法敵もいできたり、謗法もおこる。これしかしながら、みづから、わが法を破謗するにあらずや。

たとひ、諸門こぞりて、「念仏はかひなきひとのた
めなり。その宗あさし、いやし」といふとも、さらに
あらそはずして、「われらがごとく、下根の凡夫、一
字不通のものの、信ずればたすかるよし、うけたまは
りて信じさふらへば、さらに、上根のひとのために
は、いやしくとも、われらがためには、最上の法にて
まします。たとひ、自余の教法すぐれたりとも、みず
からがためには、器量およばざれば、つとめがたし。
われもひともし生死をはなれんことこそ、諸仏の御本意
にておはしませば、御さまたげあるべからず」とて、
にくひ気せずは、たれのひとかありて、あだをなすべ
きや。かつは、諍論のところには、もろもろの煩惱お
こる。智者遠離すべきよしの証文さふらふにこそ。

故聖人のおほせには、「この法をば信ずる衆生もあ
り、そしる衆生もあるべしと、仏ときおかせたまひた
ることなれば、われはすでに信じたてまつる。また、
ひとありてそしるにて、仏説まことなりけりと、しら
れさふらう。しかれば、往生はいよいよ一定とおもひ
たまふなり。

あやまつて、そしるひとのさふらはざらんこそ、
いかに、信ずるひとはあれども、そしるひとのなきや
らんともおぼへさふらひぬべけれ。かくまふせばと
て、かならず、ひとにそしられんとはあらず。仏
の、かねて信謗ともにあるべきむねをしろしめして、

ひとのうたがひをあらせじと、ときおかせたまふことをまふすなり」とこそさふらひしか。

いまの世には、学文して、ひとのそしりをやめ、ひとへに、論義問答むねとせんと、かまへられさふらうにや。学問せば、いよいよ、如来の御本意をしり、悲願の広大のむねをも存知して、「いやしからん身にて往生はいかが」なんど、あやぶまんひとにも、本願には善悪・浄穢なきおもむきをも、とききかせられさふらはばこそ、学がく生しやうのかひにてもさふらはめ。たまたま、なにごころもなく、本願に相応して念仏するひとをも、「学文してこそ」なんどいひをどさるること、法の魔ま障しやう一七なり、仏の怨敵なり。みづから、他力の信心かくるのみならず、あやまつて他をまよはさんとす。

つつしんでおそるべし、先師の御ところにそむくことを。かねてあはれむべし、弥陀の本願にあらざることを。

第十三条

弥陀の本願不思議におはしませばとて、悪をおそれざるは、また、本願ばかりとて、往生かなふべからずといふこと。

この条、本願をうたがふ、善悪の宿業をころえざるなり。

よきところのおこるも、宿善のもよほすゆへなり。悪事のおもはれせらるるも、悪業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには「卯毛・羊毛のさきにいるちりばかりもつくるつみの、宿業にあらずといふことなしとしるべし」とさふらひき。

またあるとき、「唯円房は、わがいふことをば信ずるか」と、おほせのさふらひしあひだ、「さんさふらう」とまふしさふらひしかば、「さらば、いはんことたがふまじきか」と、かかねておほせのさふらひしあひだ、つつしんで領状まふしてさふらひしかば、「たとへば、ひと千人ころしてんや、しからば往生は一定すべし」とおほせさふらひしとき、「おほせにてはさふらへども、一人も、この身の器量にては、ころしつべしともおぼへずさふらう」とまふしてさふらひしかば、「さては、いかに親鸞がいふことをたがふまじき

とはいふぞ」と。「これにてしるべし、なにごとまころにまかせたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども、一人にても、かなひぬべき業縁なきによりて、害せざるなり。わがころのよくて、ころさぬにはあらず、また害せじとおもふとも、百人・千人をころすこともあるべし」とおほせのさふらひしかば、われらが、ころのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて、願の不思議にてたすけたまふといふことをしらざることを、おほせのさふらひしなり。

そのかみ、邪見におちたるひとあつて、悪をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませばとて、わざとこのみて悪をつくりて、往生の業とすべきよしをいひて、やうやうに、あしざまなることのきこへさふらひしとき、御消息に、「くすりあればとて、毒をこのむべからず」とあそばされてさふらふは、かの邪執をやめんがためなり。まつたく、悪は往生のさはりたるべしとにはあらず。持戒・持律にてのみ本願を信ずべくは、われら、いかでか、生死をはなるべきやと。かかるあさましき身も、本願にあひたてまつりてこそ、げにほこられさふらへ。さればとて、身にそなへざらん悪業は、よもつくられさふらはじものを。

また、「うみ・かわに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまにししをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがらも、あきなゐをし、田畠をつくりてすぐるひとも、ただおなじことなり」と。「さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし」とこそ、聖人はおほせさふらひしに、当時は後世者ぶりして、よからんものばかり念仏まふすべきやうに、あるひは道場にわりぶみをして、なむなむのことしたらんものをば、道場へいるべからずなんどといふこと、ひとへに、賢善精進の相をほかにしめして、うちには虚仮をいだけるものか。

願にほこりてつくらんつみも、宿業のもよほすゆへなり。されば、よきことも、あしきことも、業報にさしまかせて、ひとへに、本願をたのみまひらすればこそ、他力にてはさふらへ。『唯信抄』にも、「弥陀、いかばかりのちからましますとしりてか、罪業のみなれば、すくはれがたしとおもふべき」とさふらうぞかし。本願にほこるころのあらんにつけてこそ、他力をたのむ信心も決定しぬべきことにてさふらへ。

おほよそ、悪業・煩惱を断じつくしてのち、本願を信ぜんのみぞ、願にほこるおもひもなくてよかるべきに、煩惱を断じなば、すなはち、仏になり、仏のためには、五劫思惟の願、その詮なくやましますさん。

本願ばかりといましめらるるひとびとも、煩惱・不
淨具足せられてこそさふらうげなれ、それは願ほこら
るるにあらずや。いかなる悪を本願ばかりといふ、い
かなる悪かほこらぬにてさふらうべきぞや。かへり
て、こころをさなきことか。

第十四条

弥陀の本願不思議におはしませばとて、悪をおそれざるは、また、本願ぼこりとて、往生かなふべからずといふこと。

この条、本願をうたがふ、善悪の宿業をこころえざるなり。

よきこころのおこるも、宿善のもよほすゆへなり。悪事のおもはれせらるるも、悪業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには「卯毛・羊毛のさきにいるちりばかりもつくるつみの、宿業にあらずといふことなしとしるべし」とさふらひき。

またあるとき、「唯円房は、わがいふことをば信ずるか」と、おほせのさふらひしあひだ、「さんさふらう」とまふしさふらひしかば、「さらば、いはんことたがふまじきか」と、かさねておほせのさふらひしあひだ、つつしんで領状まふしてさふらひしかば、「たとへば、ひと千人ころしてんや、しからは往生は一定すべし」とおほせさふらひしとき、「おほせにてはさふらへども、一人も、この身の器量にては、ころしつべしともおぼへずさふらう」とまふしてさふらひしかば、「さては、いかに親鸞がいふことをたがふまじきとはいふぞ」と。「これにてしるべし、なにごともこころにまかせたることならば、往生のために千人ころ

せといはんに、すなはちころすべし。しかれども、一人にても、かなひぬべき業縁なきによりて、害せざるなり。わがころのよくて、ころさぬにはあらず、また害せじとおもふとも、百人・千人をころすこともあるべし」とおほせのさふらひしかば、われらが、ころのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて、願の不思議にてたすけたまふといふことをしらざることを、おほせのさふらひしなり。

そのかみ、邪見におちたるひとあつて、悪をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませばとて、わざとこのみて悪をつくりて、往生の業とすべきよしをいひて、やうやうに、あしきまなることのきこへさふらひしとき、御消息に、「くすりあればとて、毒をこのむべからず」とあそばされてさふらふは、かの邪執をやめんがためなり。まつたく、悪は往生のさはりたるべしとにはあらず。持戒・持律にてのみ本願を信ずべくは、われら、いかでか、生死をはなるべきやと。かかるあさましき身も、本願にあひたてまつりてこそ、げにほこられさふらへ。さればとて、身にそなへざらん悪業は、よもつくられさふらはじものを。

また、「うみ・かわに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまにししをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがらも、あきなるをし、田畠を

つくりてすぐるひとも、ただおなじことなり」と。
「さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし」とこそ、聖人はおほせさふらひしに、当時は後ご世者ぶりして、よからんものばかり念仏まふすべきやうに、あるひは道場にわりぶみをして、なむなむのことしたらんものをば、道場へいるべからずなどといふこと、ひとへに、賢善精進の相をほかにしめして、うちには虚仮をいだけるものか。

願にほこりてつくらんつみも、宿業のもよほすゆへなり。されば、よきことも、あしきことも、業報にさしまかせて、ひとへに、本願をたのみまひらすればこそ、他力にてはさふらへ。『唯信抄』二一にも、「弥陀、いかばかりのちからましますとしりてか、罪業のみなれば、すくはれがたとおもふべき」とさふらうぞかし。本願にほこるころのあらんにつけてこそ、他力をたのむ信心も決定しぬべきことにてさふらへ。

おほよそ、悪業・煩惱を断じつくしてのち、本願を信ぜんのみぞ、願にほこるおもひもなくてよかるべきに、煩惱を断じなば、すなはち、仏になり、仏のためには、五劫思惟の願、その詮なくやましますん。

本願ぼこりといましめらるるひとびとも、煩惱・不淨具足せられてこそさふらうげなれ、それは願ほこら

るるにあらずや。いかなる悪を本願ばかりといふ、いかなる悪かほこらぬにてさふらうべきぞや。かへりて、こころをさなきことか。

第十五条

煩惱具足の身をもつて、すでにさとりをひらくといふこと。この条、もつてのほかのことにさふらう。

即身成仏は、真言秘教の本意、三蜜行業の証果なり。六根清浄は、また、法花一乗の所説、四安樂の行の感徳なり。これみな、難行上根のつとめ、観念成就のさとりなり。来生の開覚は、他力浄土の宗旨、信心決定の通故なり。これまた、易行下根のつとめ、不簡善惡の法なり。

おほよそ、今生においては、煩惱・惡障を断ぜんこと、きはめてありがたきあひだ、真言・法花を行ずる浄侶、なをもつて、順次生のさとりをいのる。いかにいはんや、戒行・恵解ともになしといへども、弥陀の願船に乗じて、生死の苦海をわたり、報土のきしにつきぬるものならば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらはれて、尽十方の無碍の光明に一味にして、一切の衆（生）を利益せんときにこそ、さとりにてはさふらへ。

この身をもつてさとりをひらくとさふらうなるひとは、釈尊のごとく、種々の応化の身をも現じ、三十二相・八十随形好をも具足して、説法利益さふらうにや。これをこそ、今生にさとりをひらく本とはまふしさふらへ。

『和讃』にいはく、「金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ、弥陀の心光摂護して、ながく生死をへだてける」とはさふらうは、信心のさだまるときに、ひとたび摂取してすてたまはざれば、六道に輪廻すべからず。しかれば、ながく、生死をばへだてさふらうぞかし。かくのごとくしるを、さとるとはいひまぎらかすべきや。あはれにさふらうをや。

「浄土真宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならひさふらうぞ」とこそ、故聖人のおほせにはさふらひしか。

第十六条

信心の行者、自然にはらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋・同侶にもあひて口論をもしては、かならず廻心すべしといふこと。この条、断悪修善のここちか。

一向専修のひとにおいては、廻心といふこと、ただひとたびあるべし。その廻心は、日ごろ、本願他力真宗をしらざるひと、弥陀の智慧をたまはりて、日ごろのころにては往生かなふべからずとおもひて、もとのころをひきかへて、本願をたのみまひらするをこそ、廻心とはまふしきふらへ。

一切の事に、あした・ゆふべに廻心して、往生をとげさふらうべくは、ひとのいのちは、いづるいき、いるほどをまたずしてをはることなれば、廻心もせず、柔和・忍辱のおもひにも住せざらんさきに、いのちつきば、摂取不捨の誓願は、むなしくならせおはしますべきにや。

くちには、願力をたのみたてまつるといひて、ころには、さこそ、悪人をたすけんといふ願、不思議にましますといふとも、さすが、よからんものをこそ、たすけたまはんずれとおもふほどに、願力をうたがひ、他力をたのみまひらするころかけて、辺地の生

をうけんこと、もつともなげきおもひたまふべきことなり。

信心さだまりなば、往生は弥陀にはからはれまひらせてすることなれば、わがはからひなるべからず。わろからんにつけても、いよいよ、願力をあをぎまひらせば、自然のことはりにて、柔和・忍辱のころもいでくべし。すべて、よろづのことにつけて、往生には、かしこきおもひを具せずして、ただほればれと、弥陀の御恩の深重なること、つねはおもひいだしまひらすべし。しかれば、念仏もまふされさふらう。これ、自然なり。わがはからはざるを、自然とまふすなり。これ、すなはち、他力にてまします。しかるを、自然といふことの、別にあるやうに、われものしりがほにいふひとのさふらうよし、うけたまはる。あさましくさふらう。

第十七条

辺地往生をとぐるひと、つるには地獄におつべしといふこと。この条、なにの証文にみへさふらうぞや。学生だつるひとのなかに、いひいださるることにてさふらうなるこそ、あさましくさふらへ。経論・正教をば、いかやうにみなされてさふらうらん。

信心かけたる行者は、本願をうたがふによりて、辺地に生じて、うたがひのつみをつぐのひてのち、報土のさとりをひらくとこそ、うけたまはりさふらへ。

信心の行者すくなきゆへに、化土におほくすすめいれられさふらうを、つるにむなしくなるべしときさふらうなるこそ、如来に虚妄をまふしつけまひらせられさふらうなれ。

第十八条

仏法のかたに、施入物の多少にしたがつて、大・小仏になるべしといふこと。この条、不可説なり、不可説なり。比興のことなり。

まづ、仏に大・小の分量をさだめんこと、あるべからずさふらうか。かの、安養浄土の教主の御身量をとかれてさふらうも、それは、方便報身のかたちなり。法性のさとりをひらひて、長短方円のかたちにもあらず、青・黄・赤・白・黒のいろをもはなれなば、なにももつてか、大小をさだむべきや。念仏まふすに、化仏をみたてまつるといふことのさふらうなるこそ、大念には大仏をみ、小念には小仏をみるといへるか、もし、このことはりなにとにばし、ひきかけられさふらうやらん。

かつは、また、檀波羅蜜の行ともいひつべし。いかに、たからものを仏前にもなげ、師匠にもほどこすとも、信心かけなば、その詮なし。一紙・半銭も仏法のかたにいれずとも、他力にこころをなげて、信心ふかくは、それこそ願の本意にてさふらはめ。

すべて、仏法にことをよせて、世間の欲心もあるゆへに、同朋をいひをどさるるにや。

後記

右条々は、みなもつて、信心のことなるより、ことおこりさふらうか。

故聖人の御ものがたりに、法然聖人の御とき、御弟子そのかずおはしけるなかに、おなじく御信心のひともすくなくおはしけるにこそ、親鸞、御同朋の御なかにして、御相論のことさふらひけり。そのゆへは、

「善信が信心も、聖人の御信心も、ひとつなり」とおほせのさふらひければ、勢観房・念仏房なんどまふす御同朋達、もつてのほかにあらずひたまひて、「いかでか、聖人の御信心に、善信房の信心、ひとつにはあるべきぞ」とさふらひければ、「聖人の御智慧・才覚ひろくおはしますに、一ならんとまふさばこそ、ひがごとならめ、往生の信心においては、まつたく、ことなることなし、ただひとつなり」と御返答ありけれども、なを、「いかでかその義あらん」といふ疑難ありければ、詮ずるところ、聖人の御まへにて、自他の是非をさだむべきにて、この子細をまふしあげければ、法然聖人のおほせには、「源空が信心も、如来よりたまはりたる信心なり、善信房の信心も、如来よりたまはらせたまひたる信心なり、されば、ただひとつなり。別の信心にておはしまさんひとは、源空がまひらんずる浄土へは、よもまひらせたまひさふらふはじ」

とおほせさふらひしかば、当時の一向専修のひとびとのなかにも、親鸞の御信心にひとつならぬ御こともさふらうらんとおぼへさふらふ。いづれも、いづれも、くりごとにてさふらへども、かきつけさふらうなり。

露命、わづかに、枯草の身にかかりてさふらうほどにこそ、あひともなはしめたまふひとびと、御不審をもうけたまはり、聖人のおほせのさふらひしおもむきをも、まふしきかせまひらせさふらへども、閉眼ののちは、さこそ、しどけなきことどもにてさふらはんずらめと、なげき存じさふらひて、かくのごとくの義ども、おほせられあひさふらうひとびとにも、いひまよはされなんどせらるることのさふらはんときは、故聖人の御ころにあひかなひて、御もちるさふらう御聖教どもを、よくよく御らんさふらうべし。おほよそ、聖教には、真実・権仮、ともにあひまじはりさふらうなり。権をすてて実をとり、仮をさしおきて真をもちゐるこそ、聖人の御本意にてさふらへ。かまへてかまへて、聖教をみ、みだらせたまふまじくさふらう。大切の証文ども、少々ぬきいでまひらせさふらうて、目やすにして、この書にそえまひらせてさふらうなり。

聖人のつねのおほせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに、親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にてありける

を、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐さふらひしことを、いままた案ずるに、善導の「自身は、これ、現に、罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしづみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」といふ金言に、すこしもたがはせおはしませず。

されば、かたじけなく、わが御身にひきかけて、われらが身の罪惡のふかきほどをもしらず、如来の御恩のたかきことをもしらずしてまよへるを、おもひらせんがためにてさふらひけり。

まことに、如来の御恩といふことをば、さたなくして、われもひとも、よし・あしといふことをのみまふしあへり。

聖人のおほせには、「善惡のふたつ、惣じてもつて存知せざるなり。そのゆへは、如来の御ところに、よしとおぼしめすほどに、しりと（ほ）したらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどに、しりとほしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ、念仏のみぞまことにておはします」とこそ、おほせはさふらひしか。

まことに、われも、ひとも、そらごとをのみまふしあひさふらふなかに、ひとつ、いたましきことのさふ

らうなり。そのゆへは、念仏まふすについて、信心のおもむきをもたがひに問答し、ひとにもいひきかするとき、ひとのくちをふさぎ、相論をたたんがために、まつたく、おほせにてなきことをも、おほせとのみまふすこと、あさましくなげき存じさふらうなり。このむねを、よくよくおもひとき、こころえらるべきことにさふらう。

これ、さらに、わたくしのことばにあらずといへども、経釈のゆくぢもしらず、法文の浅深をこころえわけたることもさふらはねば、さだめて、おかしきことにてこそさふらはめども、古親鸞のおほせごとさふらひしおもむき、百分が一、かたはしばかりをも、おもひいでまひらせて、かきつけさふらうなり。

かなしきかなや、さひはひに念仏しながら、直に報土にむまれずして、辺地にやどをとらんこと、一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なくなくふでをそめて、これをしるす。なづけて、『歎異抄』といふべし。外見あるべからず。

流罪記録

後鳥羽院の御宇、法然聖人、他力本願念仏宗を興行す。ときに、興福寺の僧侶、敵奏のうへ、御弟子のうち、狼藉子細あるよし、無実の風聞によりて罪科に処せらるる人数のこと。

一 法然聖人ならびに御弟子七人、流罪。また御弟子四人、死罪におこなはるるなり。聖人（法然）は土佐国幡多といふ所へ流罪、罪名、藤井元彦、男云々、生年七十六歳なり。親鸞は越後国、罪名、藤井善信云々、生年三十五歳なり。浄聞房 備後国。澄西禅光房 伯耆国。好覚房 伊豆国。行空法本房 佐渡国。幸西成覚房・善恵房二人、同遠流に定まる。然るに無動寺の善題大僧正、これを申しあづかると云々。遠流の人々、已上八人なりと云々。

死罪に行はるる人々、

一番 西意善綽房

二番 性願房

三番 住蓮房

四番 安楽房

二位法印尊長の沙汰なり。

親鸞、僧儀を改めて、俗名を賜ふ。よつて僧にあらず俗にあらず、しかるあひだ、禿の字をもつて姓となして、奏聞を経られをはんぬ。かの御申し状、いまに

外記の片に納まると云々。流罪以後、愚禿親鸞と書か
しめたまふなり。